

# More Than Words

～言葉よりも大切なもの～

橋本コウ

## キス

---

「ねえ、チューしてよ」彼女は囁いた。手をつなぐよりも、からだを触るよりも、エッチをするよりも、キスは段階が上だ。「チュ」。彼女と僕は1つになった。もの言う口が閉じられて、彼女も僕も、もう嘘なんて言えない。「もごもごもご」「ん？なに？」「ちゅき」

## 運命のハンカチ

---

地下鉄を降りて階段を上っていると、前の女の子がハンカチを落とした。拾ってあげたがそっけない「ありがとう」の一言。運命の出会いなんてあるわけがなかった。そのとき後ろからトントントン。僕が振り向くと僕のハンカチを手にしてうつむいている女の子がいた。

## 愛すべき人、もしくは・・・

---

上目づかいした目がかわいい。かしげた顔がかわいい。声がかawaii。ものごしがかわいい。カラダがやわらかくてかわいい。いっしょに眠るともってかわいい。マイペースなところがかわいい。たまに従順なところがかわいい。お口がかawaii。横顔もかわいい。おしりはすごくかわいい。

## オムライス、そして別れ

---

「オムライスとハンバーグどっちが好き？」それはオムライスだ。「なんで？」オムライスには愛が感じられるからだ。「じゃあ、あたしが作ったハンバーグと、リエちゃんが作ったオムライスのどっちが好き？」それはオムライスだ。「なんで？」リエちゃんが好きだからだ。「は？」

## すれちがいの愛

---

男女が車で事故を起こして、ふたりとも記憶喪失になった。でも実は男は女と別れたかったから記憶喪失を装っただけ。女の方も記憶はあったが「ホントは好きだけどしょうがない」と諦めて装った。それを知った男は、失ってしまった彼女のことを本当は愛していたことがわかり泣いた。

## メロンソーダ色

---

メロンソーダの味がする女の子を好きになった。本来、メロンソーダは甘いんだけど、これが甘酸っぱくなると、もっと美味しかった。明らかに自然な色とは正反対の毒々しい緑色だから、僕の恋もサイケデリックになってもいい。「舌がメロン味だね」って会話があれば、僕は幸せかも。

## さんぽ

---

歩こう、歩こう、わたしは元気。きつねやたぬきは出てこないけど、ビルや民家や電信柱の影、人ごみや野良猫や鳥たちのさえずり。歩くと世界のいろんなものが見えてくる。僕はくねくねとして細い、もしかすると袋小路になっていそうな小道を歩くのが好きだ。カレーの匂いにキュンしたい。



## メール着信音

---

メールが届く音がする。iPhoneの着信音はシンプルだけど、なぜか期待感をあおる音だ。ドロン。僕はメールをチェックする。いつ登録したか覚えていないメルマガだった。「削除」。だんだん良いメールとどうでも良いメールの着信音のわずかな違いがわかってきて悲しくなった。

## 引越

---

荷造りを終えた。僕の部屋の中にあった日用品や、洋服や、CDが、半分になった。お揃いのコップに立てていた歯ブラシが1本になり、クローゼットに空きができ、好きだった歌が聞けなくなった。僕たちで築いた僕の部屋。すべてが半分になった。数日後、僕の心も半分になった。

## 酔い

---

「わたしを酔わせてどうするつもり？」彼女は、青いカクテルをひとくち飲んだ後に囁いた。青いカクテルに赤く頬を染めた彼女のコントラストが僕をそそる。「そんな言葉で僕を酔わせてどうするつもり？」目が合った。僕たちは、そのままバーを出て、ネオンの中に飛び込んだ。

## 爪のキレイな女の子

---

爪のキレイな女の子はスキップで銀座の道を進んだ。夜だから爪は見えないけど、スキップしながら後ろに組んだ手に、彼女のキレイな爪が光っているのだろう。派手なネイルではなく、透明で艶っぽい爪は、銀座の夜によく似合っている。でもスキップは銀座っぽくはないんだけど。

## 雨女

---

大雨の中を僕たちは進んだ。これが雨女のチカラ。傘をさしても意味のないくらいの豪雨は、むしろ潔くて良い。相合傘、雨が滴る濡れた髪、ゆっくりな足どり。僕たちはどこへ向かうのか？ 駅に行ってバイバイするか、それとも街を彷徨うのか。僕としては雨に濡れたカラダを温めたい。

## パワスト

---

フジヤマの麓の湖には、たくさんのチカラがたぎっていた。湖だけにかかる虹ができたり、龍の巣ができたり。「石には力が宿されています」売店のおばさんがそう言ったことを信じて、僕は石を買ったのだ。ポケットの中の石をジャラジャラ鳴らしながら、今日から歩いていくよ。

## 料理と「あ〜ん」

---

料理は嫌いじゃないけれど、女の子といっしょに料理をするときは、手伝いをするのが好きだ。塩コショウを渡したり、使い終わったボールを洗ったり、お皿を出したり、そういう行動が、なんとも幸せだと感じる。でも、「あ〜ん」が苦手だから、それが僕の今後の課題。

## Boy's Love

---

男は男のツボを知っているんだろう。僕は女の子が好きだけど、男友達の攻撃を許してしまったことがある。それは予想外にすごいもんだ。もちろん、すごくソフトな領域ではあったんだけど。男も女もいっしょ。自分を扱うように女の子を扱えば、少なくともまあまあではあるんだな。



## iPhoneの使い方

---

Phoneの画面が割れてしまった。4S買えばいいやって思ってたんだけど、若干のメリットを見つけた。ヒビが集中してるところって、文字が見えにくくなるんだけど、メールが見えなくて、少しずらして見たりする。あの子からのメールをずらして見るのを、僕は覚えた。

## 並行電車

---

山手線と京浜東北線は、ある区間中、並行走行している。だから、こっちにいる僕から、あっちにいるあの子がずっと見えている。近いけど遠い。その日限りの恋に、僕は儚さを感じた。でも、次の日は、こっちの山手線にあの子がいた。「京浜東北線に乗らなくて良かった」

## 鳩のマメオ

---

僕はマメオ。鳩の男だい。人間をなめることに精を出しているんだ。こっちに歩いて来ても、ギリギリまで避けてあげない。そして公園で余裕ぶっこきながら、人間が仕事に行くのを見て「ざまーみろ」って思うのが僕の朝。どうだ、うらやましいだろ！

石をいっしょに握って、ふたりで叫びたい。手と手をあわせることで感じる体温は、すべてを可能にしてくれる。そんな少年と少女のような恋をしたいと思っている32歳の僕って、やっぱり子供なのだろうか。みんな大人のふりして、本当は子供のような恋に焦がれていると思いたい。

## 草食系の悲哀

---

彼はずっとずっと彼女のことを好きだった。いっしょに映画を観たり、遊園地に行ったり、紅葉を見たりした。だけど、彼女は別の男を恋人として選んだ。これは彼女の裏切りではなく、彼のもう一歩の行動力がなかったのだろう。いちばん傷ついて悲しんだのは彼女だったのかもしれない。

## もっと妬いて

---

妬いて、妬いて、もっとわたしを妬いて。わたしの中に、切り刻まれた生々しい欠片や、とろとろの粘液を混ぜて、わたしが昇天しちゃうくらいの灼熱の地にわたしを連れてって。そして、わたしをあなたの中に入れてほしい。あなたはきっとわたしに満足して、幸せになれるはず。

## 過去の声、未来への声

---

目を閉じて、耳をすませば、遠くから聞こえる声がある。その声たちは僕に、遥か数千年前の彼らの生き様や、ほんのわずか数十年前の彼らの死に様を、まぶたの裏に克明に描写してくる。僕たちはその流れの延長線上に生きているのだ。僕たちは、この声を未来に流さねばならない。

## ドラッグ

---

これは麻薬なのだろうか？この薬を口にすると、頭も身体もとろけるような感覚になり、だんだんと痺れを帯びてくる。僕はどの世界を彷徨っているのかわからなくなる。目を瞑るとそこは宇宙の彼方か、もしくは花畑の中にいるようだけど、目を開けるとそこにあるのは人間の目だった。



もしも煙に生まれ変わったなら、僕は何をするだろう？自由気ままに大空に羽ばたき、空の藻屑となるか。僕を吐き出した人間に襲いかかり、力強い手で追いやられて空気に同化するか。生まれたくて生まれたわけでないこの境遇を嘆いても命は数秒なのだから、喜んで藻屑となってやろう。

## 壊れかけのiPhone

---

それはまるで、落雷のような形をなし、僕の行く手を遮ろうとする。視覚、触覚ともに、その不安定さが、僕を不安にする。僕はこの強敵に叩きのめされないように、より強く、相手を強打しなければならぬのだ。

## A Walking

---

女の子でも歩くのが速い人がいて、僕はどうしてもその子を前から見たかった。足を前に踏み出すピッチが速いあの子に追いつくために、僕はピッチは変えずに歩幅を大きくする。ピッチを上げるとバレてしまいそうだから。僕は追いついたが、今度は振り向く勇気が必要だ。がんばれ。

## in the Park

---

光、緑、水。公園が僕を癒してくれる。公園は、地球を地球たらしめる要素で満たされている。だから人々はここに集い、笑い、会話するのだろう。それはきっと、大昔に動物たちが成していたコミュニティとほとんど一緒に、これからも生きていくのだ。

## チワワ

---

金色に輝く毛皮に覆われたもの。人間に着せられた、色とりどりの布が、彼の毛皮を隠すのは、なんて畏れ多いことだろう？彼は人間界に縛られている。身も心も。もっと自由に生きられた彼の先祖は、とおいメキシコの歴史に埋れてしまった。チワワに自由を。

## 飲み部

---

馴染みのない人たちがお酒を求めて集まり、それが週1、週2と回数が増え、いつのまにか馴染みのない人同士は、仲の良い人同士になっていく。お酒からはじまるコミュニティは、老若男女、さまざまな職業につく人から形成され、ひとことで言えば「飲み部」としか言えない。

## 見えない気持ち

---

彼の気持ちがわからない。わたしのことを好きなのか、そうではないのか。行動、言動的には、わたしのことを好きな気がする。でも、他の人にもそうしている気がする。ああ、神様。彼の真意を教えてください。わたしから動いて彼の真意を確かめるには、わたしは傷つきすぎました。

走れ！

---

走れ！あの子に追いつけるように、僕はトップギアでペダルをこぎまくった。坂道でもあの子は自転車を降りないから、僕ももっと強くこがなきゃ。あの子の後ろ髪を結んでいるゴムが見えた。はっきりと白色のゴムが見えた。でも、追いつくだけじゃダメだ。あの髪を捕まえないと。



## 好き好きライト

---

相手が自分のことを好きかどうか、いやせめて気になってるかどうか、わかる機械があったらいいのに。たとえば、気になる時にはピコピコ光る携帯とか。そうすれば、みんなこんなに悩まされない。でも今度は、ピコピコ光ることのない携帯に悩まされるかもしれない。悩ましい問題だ。

## 女子高生

---

東京から2時間くらいの地方にいる女子高生がかわいい。ちょっとワルっぽい格好をしていても、駅で母親が迎えにくるのを待っている姿や、ファンタとかの甘いジュースを飲んでいる姿は、妙に幼く、あどけなく、僕の心はキュンとした。手を出すことのできない高嶺の花だ。

## 砂漠に水をあげよう

---

砂漠に水を与えよう。僕は水を撒きながら砂上を歩き、砂丘をのぼり、また歩いた。だんだんと砂漠が瑞々しく生き返っていくのが肌でわかった。空には眩しくて形が見えない太陽があったけれど、肌を感じる水分が僕を守ってくれた。オアシスに着いたら、泉の美味しい水を飲もう。

## 2分の1

---

ヘッドホンのLRが一発で当たらないように、世の中の2分の1は、50%の確率にはなっていない。だから僕は3人まで好きな子をつくるようにした。まわりの友達は「ひとりに絞りなさい」というけれど。

## 朝食はツナサンド

---

それだけでもよいけれど、挟むともっと気持ちよくなる。両側から優しく包み込み、そこに情熱的なソースを注ぎ、今度はより強く挟む。出されたものは、口の中で舌と混じり合い、トロトロの甘みを帯びる。僕の欲求は満たされて、出社前なのに、立つこともできない。

## S

---

脳が痺れそう。僕の身体の硬く反っているところを、彼女が優しく、そして強くなぞる。僕は彼女の呼吸に合わせてるように、身体をよじらせ、脳の痺れに恍惚感を覚えながら、最後に彼女を見つめた。彼女の微笑は、Sに支配されたそれだった。

## 表と裏の姿

---

「表向きの姿と、リアルな姿に、矛盾点があってはダメだよ」わたしの作ったパスタを食べながら、彼がいった。突然の彼の言葉にわたしは戸惑った。「なんの話？」彼はパスタをフォークで巻きながら「要するに、お前が恋人で良かったってこと」よくわからないけど、別にいいや。

## Meijiの乱

---

「きのこの森」と「たけのこの里」の熾烈な争い。僕はもともと、きのこが好きだったが、ある時たけのこを好きになった。そしてまたあるとき、きのこに戻った。そして今日、たけのこに帰ってきた。このループはなんとかならないだろうか。スナック部分が決め手だ。



## 生命のダンス

---

生まれたてのような瑞々しさと、滑りの良さそうな油っぽさと、鼓動がほとばしるような生命力。さあ、僕とダンスをしよう。僕はそこから吸い取ったエネルギーをもって、人生に彩りを添える。

## 雨の神楽坂

---

神楽坂には雨が似合う。あの坂に漂う淡い光を、残像が残るようにぼやけさせて、目も心も情緒的にしてくれる。雨はだまったまま、降り続けている。こんな坂道を着物の女性と歩けたら幸せだけど、ひとりで歩いている僕は切なすぎる。所詮、男に雨は似合わないのだ。

## ロケットダイブ

---

幾重にも重ねた絨毯に向けて、僕はダイブしようと思う。僕は気持ちを高揚させつつも、ドキドキと胸を叩く切迫感で、飛ぶまでに時間がかかる。あの正方形をした絨毯にちゃんと着地できるのか、一抹の不安を覚えた。気持ちを最高潮にもっていき、ダイブ。気持ちいい！

## もしもチワワと話したら

---

もしもチワワと話したら僕は死んでもいい。あいつは何て言ってるんだろう。「いつも優しくしてくれてありがとう」「こうちゃん、かっこいいね」「昨日のごはん、美味しかったよ」「また散歩に行こうね」「寝相悪くてごめんね」「ずっと一緒にいようね」僕は思う。やっぱり死ねないって。

## 本当は怖い三匹の子豚

---

三匹の子豚がいました。長男のブー太は六厘舎に、次男のブー二郎はとみ田に、三男のブー三郎は頑者に行きました。狼に食べられるよりは、人を幸せにできる分、三匹の子豚は幸せだったかもしれません。

## 明暗

---

太陽の明るさと、心の暗さの、どっちが勝つのか。僕は、太陽に目が眩んでもいいから、そっちに賭けたい。

## コーヒー

---

「甘いのと、苦いのと、どっちが好き？」朝、パンをかじっていると彼女が聞いてきた。「今更だけど、苦いのが好き」僕は新聞に目を落としたまま答えた。その日から彼女が僕に厳しくなった。「え？コーヒーの話じゃないの？」僕は自問したが、答えは結局わからずじまいだ。

## 特攻

---

もし僕が特攻を任命されたら、何を思うだろう。守るべき人もいない（愛する犬はいる）し、仕事もたぶん残された人でやれるだろう。ただ、今日のこんな青空をみていると、無性に悲しい気持ちになる。やるべきことを成さない限り、僕は特攻にはいきませんといい、士官をぶん殴った。



「基本的に電車の中で出会った人って、残りの人生で会える可能性は低い」そう考えると、人ってほとんどの他人に知られず、自分と関係者のために生きてるんだなって思う。一人一人が精一杯生きてるのって、すばらしい反面、虚しい気がしたが、さっきのあの子にはまた会いたい。

## ロボットの優しさと暴力

---

二足歩行をするロボットには、まだ感情はない。彼らは「すごい！」と賞賛してくれることに喜びも感じない。視覚はもっているから見えてはいるのだろう。せめて歩行の次には喜びの感情を与えてほしい。そうすれば、ロボットに世界を支配されることはないだろう。無感情が危険なんだ。

## 蹂躪

---

10本の指のひとつひとつが、それぞれの生命体のように僕を蹂躪する。文字通り脳直撃のその攻撃性に、僕は苦痛の表情を浮かべる。しかし攻撃が終わると、次は快樂の瞬間を迎える。何かがカラダから吐き出されたようだ。キーワードは、蹂躪、放出、快樂だ。

## 犬には人気

---

その犬は僕をしばらく見つめたあと、やがて去っていった。彼には帰る家があるのだろう。その証拠に、彼には首輪があり、リードもつけられていて、散歩する飼主がいたからだ。でも確実にこれだけは言える。「僕の方が、彼の飼主よりも、彼に好かれている」ということを。

## 鍋

---

冬になると彼女は僕のために鍋を作ってくれた。この御馳走が僕への愛の深さだと思っていた。別れた今、自分で鍋を試してみる。「すごく簡単に作れました」僕はつぶやく。思えば1年目はオムライスとか作ってくれた。あの冬の鍋の季節に別れフラグはたっていたようだ。

## 冬の匂い

---

冬の匂いがする。灼熱の太陽に焼けつけられたあの夏の日も、昔々の写真のように色褪せて、世界はセピア色に染まっていく。変わらない人工物と変わる自然に季節を感じながら、あの人の変わらぬ想いを信じて、冬のこの日を写真におさめた。春の息吹を感じながら。

人のざわめきと、タバコの煙と、珈琲の香り。どれも欠けてはならない。新聞をめくる男性、化粧をする女性、携帯をいじる女子高生。人それぞれが別の行動をとることで、全体が調和していく。ここは小さな町だ。ただ、クシャミで調和を乱した、あのオヤジが僕は憎い。

## 公園と親子と滑り台

---

いつもとは違う公園は、様相が違った。ここには子供とその母親が多く、たくさんの幼い声が聞こえる。揺れるブランコ、砂場で転んだ男の子の泣き声、乳母車で幸せそうに眠る坊や。僕が滑り台をやってもお咎めなしなのは、みんな幸せだからだ。落ちてきた紅い落ち葉に僕は祈りをこめる。



## MEN

---

それは幾重にも絡み合って、僕に襲いかかる。息もできないほどに強く僕を魅了し、僕は滝のような汗を流した。僕と交差し、うねり、体内を熱く流れ落ちる。僕とあいつのシンクロニシティで、この世界はより高みに近づいた。あいつはもう空っぽだけど、僕の体にメモライズされた。

## 光

---

どのくらい歩いただろう？暗闇に一筋の光が見えたのは、あれから数分後なのか、数時間後なのか。僕にはわからなかった。重油の中を歩いているような重々しい足取りを、あの光が少しだけ軽くしてくれた。あれはきっと酒場だ。僕は後ろを追ってくる僕の残像を忘れて走り出した。

前も後ろも飽きました。

---

「繰り返される日々に歯止めをかける必要があるのよ。変化がプラスに働くか、マイナスに働くかはわからないけど、フラットのままでは成長はないわ。だからあなたも、今日も明日も、少しずつ変わって行ってほしい。前と後ろだけなんて、もうお互い飽きたよね」彼女が言った。

温泉にはたくさんの方が入っていた。気軽に言ってるが、そこは混浴だった。みんな一糸まとわぬ裸の姿で、単独行動をしたり、集団で集まったりしていた。火照ってきた女の子が、まず出てきた。他の人たちもちょっとずつ出てきた。みんな食べられてしまった。最後にうどんが入れられた。

## 自然の寒さと人の冷たさ

---

寒くなるほど空気は澄んでいくのに、人は冷たくなると心は荒んでいく。だけど、寒くなると風が身体を刺す痛みは増すから、人が冷たくなるのと似ているところもある。ただ自然がすごいのは、また暖かくなることだ。人が再び優しくなることは、ほとんどの場合、ない。

## 鏡の中のマリオネット

---

鏡の中の僕が、あるとき鏡から出てきて、僕のことを鏡の中に封じ込めた。彼は鏡から出れて、はじめて経験する実世界に爽快感を覚えているようだ。みょうにはしゃいで、にやけたり、かっこついたり、笑ったりしている。「頼む。気持ち悪いから、お前の顔こっちに見せないでくれ」

## 女性専用車

---

「女性専用車って、みんな脱力してすごく人が揺れるし、こっちに全体重かけてくるから、イヤなのよ」彼女は満員電車にもみくちゃにされた髪をとかしながら愚痴を呟いた。「じゃあ、1車両に4つくらい、色つきのつり輪を置いて、そこだけは男もOKにして人柱にすればいいね！」

## Fukushima

---

北の地には冷気が満ちていた。すっかり葉が枯れて裸になっている木々がたくさんある。僕はいま福島にいる。このへんにも、少量だが放射線が流れていることを、街頭にあるスピーカーが言っていた。3.11以降はじめて迎える冬だが、透明な空の色は昔と変わらない。



## 僕が100%悪い

---

約半年ぶりの彼女との再会に、僕は胸踊った。彼女に会えるのはたったの一夜。僕は飲みすぎて、深夜1時に彼女のところに行ったら彼女はもう眠っていた。早朝、東京に戻る前に寝ている彼女にキスしたけど、明らかに不機嫌そうな彼女。僕が100%悪いけど、101%愛してる。

## つり革

---

ゆらゆら揺られ、よりかかれる。女の子特有の、髪の毛のいい匂いが、僕を幻想の世界に包み込む。ここは電車ではなくて、ベッドの上。かぐわしい髪の毛を優しく撫でる。そして、だんだんと。。。僕は犯罪を犯さないよう、両手でつり革を掴んで、自分の手を封印した。

## エベレスト

---

深夜になると、日本からエベレストが見えた。その神々しい山は本当に高かったが、雪はひとかけらもなく、頂上にはかわいいデザインのお城があった。その光景に、僕はエベレストに神はいないと思った。それで安心した心持ちで、中学校まで自転車で登校する。という夢から僕は覚めた。

## 愛をください

---

僕たちはこの街じゃ、ひとりぼっちの淋しがりさん。誰とでも仲良くなりたい八方美人。朝寝坊の僕たちは、夢の世界の住人となり、現実から目を背けたエア充嗜好者。観てご覧、よく似ているだろう、誰かさんと。似てないと思います。マイノリティですよ。

## 子づくり

---

「子供は女、男、女がいいね」妻が枕元で囁いた。僕は目を閉じたまま「そうだね」わりと冷静な受け応えをした。妻はさっそく子作りとばかりに攻めよって来たが、僕が「レイ、シンジ、アスカ」と呟いたら、冷めたらしく隣の部屋に行ってしまった。「カオルがいないから怒ったのかな」

## 犬の一生

---

思うに「犬の10歳は人間でいえば高齢者」と言われるけど、犬にとっては、10歳は10歳で、人間の10歳と変わらない、まだ子供なのですよ。うちのワンコの顔や、行動を見てると、そう思います。ただ、性欲だけは犬の方が大人です。通称カクカク。僕の右手が恋人なのですよ。

## 放出、沈黙

---

大量に吐き出される煌めきに、僕の鼓動は激しくなり、これでもかと容赦なく攻める。相手もまるで壊れたかのように、されるがままに吐き出し続ける。でも吐き出しきってしまうと、突然の沈黙。僕はもう一度快感を求めて攻め続けたが、疲れた相手はもうかまってくれなかった。

## G

---

僕は握った手を動かし、自分自身に力を与える。最初はゆっくり、徐々に速度を上げる。血液が集中し、僕の指は強い熱を感じとる。「もっと、もっと」。僕はオイルを塗りたくる。それはもう、高速で往復し、僕は自分を止めることができなくなる。「明日は、筋肉痛、治るかな？」



## 恋の鬼ごっこ

---

「俺とつきあって」「ごめんなさい、好きな人がいるの」僕と洋子の会話。「わたしとつきあってください」「ごめん、俺、好きな子がいるんだ」洋子と信二の会話。「俺をつきあってほしい」「ごめん、好きな人がいるの」信二と明日香の会話。でも明日香は僕を好きではないらしい。

## 珈琲

---

この液体はクセになる。甘かったり、苦かったり、僕の気持ちに合わせて七変化してくれる。チュルチュル音を立てて吸うと、もっと美味しくなるけど、その行為を嫌がる人はけっこう多い。ミルクを入れる人もいるけど、僕はそのままの方が好き。やっぱりブラックでしょ。

## 友情

---

アスカ「あんたバカー？」

シンジ「動け動け動け動け！立て立て立て立て！」

アスカ「最悪の男ね」

レイ「わたしがしてあげる」

．．．

レイ「たたないわ」

．．．

シャキーン

カオル「僕がやろう」

．．．

カオル「ほら、立ったよ」

レイ「ホント、最悪の男だわ、こいつ。死んじまえ！」

## AB型になりたい！

---

僕のA型の血をぜんぶAB型に取り替えたら、世界はどう見えるんだろう？ というわけで、僕は血液の最先端の研究をしている通称ブラッド博士に頼み込み、AB型になった。世界がどう見えようが、どうでも良くなった。

## A型の悲劇

---

「血液型って気にする人多いけど、結局几帳面じゃないA型もいるし、細かいO型もいるし、変わってないB型やAB型もいる。いちいち気にしてるのってナンセンスだよ」「そういうあなたが一番A型っぽいね。もううんざり。別れよう！」